

日本比較文化学会中部支部  
令和5年度例会  
発表抄録

日時 令和6年 2月25日(日)

会場 椋山女学園大学

星が丘キャンパス 文化情報学部メディア棟

日本比較文化学会中部支部

日本比較文化学会 中部支部 令和5年度例会

I 例会日程 令和6(2024)年2月25日(日)

II 例会スケジュール 13:00~15:30

○12:50~ Zoom 会議受付

○13:00~ 開会の挨拶(副支部長:樋口 謙一郎)

○13:05~ 研究発表

○15:15~ 総会

閉会の挨拶(支部長:白鳥 絢也)

※オンライン発表へ参加される方は、発表開始時にはマイクをミュートにして臨んでください。(発表者を除く)

※同じく、カメラでの顔出しもご遠慮ください。(発表者を除く)

※同じく、発表の録画はご遠慮ください。

## 教育課程の変遷を見つめる その5

### －「学習指導要領」（平成元年度版・10年度版）に着目して－

白鳥 絢也（常葉大学）

わが国の教育課程変遷の大きな流れを抑え、学習指導要領の求めるものを改めて捉え直していく。今回は、「平成元年度版」及び「10年度版」を抑えていく。端的には、平成元年には学校教育の位置づけやねらいが「生涯学習」の視点から大きく転換することとなり、平成10年には「変化する社会の中での学校教育のあり方の模索」ということになる。

また、学習指導要領の変遷を改めて抑えておくと、昭和22・26年度版（試案）は、「経験的」な学習（見る・聞く・話す）を重視していたが、昭和33・43年度版は、「系統的」な学習（読み・書き・計算）を重視するように変化した。しかしその後、昭和52年度版では再び「経験的」な学習（見る・聞く・話す）を重視するようになる。今回取り上げる、平成元・10年度版は、「経験的」な学習（見る・聞く・話す）を引き続き重視している。しかしながら、平成20年度版では、再び「系統的」な学習（読み・書き・計算）を重視する流れとなり、最新の平成29年度版もこれを引き継いでいる。

1989（平成元）年の学習指導要領は、「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成」を掲げていた。この時代、わが国は高度成長の終焉を迎え、その影響は庶民の生活に影を落としていた。このときの改訂の柱として、①心豊かな人間の育成、②基礎・基本の重視と個性教育の推進、③自己教育力の育成、④文化と伝統の尊重と国際理解教育の推進の四点が挙げられる。また、改訂のポイントとして、①「生活科」の新設、②道徳教育の重視の二点が挙げられるとともに、「新しい学力観」という表記が多用された。

1998（平成10）年の学習指導要領は、「基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成」を掲げていた。このときの改訂の柱として、①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚の育成、②ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実の二点が挙げられる。また、改訂のポイントとして、①教育内容の厳選、②「総合的な学習の時間」の新設の二点が挙げられるとともに、「完全学校週5日制」が実施された。この学習指導要領では、「学力低下」は避けられないとマスコミが大きく取り扱い、国会も大きく混乱し、学習指導要領を途中で見直す等、対応に追われた。

そして再び、「経験的」な学習から、「系統的」な学習を重視する学習指導要領が求められるようになってゆくのである。

## テキストとしての現地英字新聞

### —ペナン新聞をめぐる先行研究の批判的検討と文学研究における活用の展望—

二村 洋輔（至学館大学）

第二次世界大戦時中、帝国日本がプロパガンダの一環として発行していたと言われる英字新聞に関する研究は（パウエル 149）、主に歴史学の分野にて研究が進んできた。マレーシア国内におけるマスメディアの歴史を包括的に記述した John A. Lent の研究をはじめとして、先行研究では、さまざまな文脈において英字新聞が歴史資料として用いられてきた。例えば、リチャード・パウエルは、シンガポール陥落後推進された英語使用廃止計画にも関わらず、終戦まで発行し続けられた英字新聞を言語政策との関わりにおいて論じ、黒崎友美は日本占領期のマレー半島におけるムスリムの宗教行事を論じる上で、軍政当局による関与や宣伝利用、スルタンのメッセージなどに注目した先行研究に対して、それまで活用されていなかった英字新聞やマレー語雑誌に史料価値を見だし、積極的に活用した。

歴史的事象を解明する上で、英字新聞が二次的資料としての価値を保持していることは疑いようのないものである一方<sup>1</sup>、同メディアはそれ以上の可能性を秘めている。歴史的事実を参照するための二次的資料として参照する例は無数にみられるものの、それを「一次的資料」、もしくは一つの「作品」として分析している例は多くない。本発表では、帝国日本によるマラヤ占領中、ペナンにて発行されていた *Penang Shimbun*（『ペナン新聞』）を例として取り上げながら、英字新聞の文学研究における活用の可能性を考察する。特に、分析ツールとして Norman Fairclough、Ruth Wodak、Tuen Dijk などを旗手として 80 年代以降登場してきたクリティカル・ディスコース・アナリシス（Critical Discourse Analysis; CDA）の利用可能性に注目して考察したい。

---

<sup>1</sup> 歴史家たちのみならず、彼らの仕事に習い、日本文学の研究者たちも近年では積極的に新聞というメディアを文学研究の文脈にて利用してきた（神谷；神谷・木村など）。

## 大学英語教育における探究的実践 (Exploratory Practice) の意義

松家 鮎美 (岐阜薬科大学)

日本の英語教育では長年、文法や訳読を中心とした授業が行われてきたが、現在は、英語によるコミュニケーション力の養成を目的とした授業が行われている。その一方、学習者は教室での活動において英語を話すことに不安を感じているという指摘がある (Horwitz et al., 1986)。話す力を伸ばしたいと思いつつも、間違えることに対する不安や、英語に対する苦手意識を持つ学習者は少なくない。そのため、学習者に他者とのコミュニケーションを積極的に取らせようとする授業は、学習者の不安を助長し、教室が学習者にとって脅威の環境になるという可能性も指摘されている。

本研究では、学習者が安心して授業を受けること、教室の Quality of Classroom Life を高めることを目的とし、探究的実践の意義について論じる。探究的実践 (Exploratory Practice) とは、1980 年代の科学的な実験研究、1990 年代のアクションリサーチを受け、2000 年代に Allwright らに提唱された理論であり、「真に包括的な実践研究」の 7 原則に基づく実践者研究のモデルである。教員と共に学習者を共同探究者とみなし、共に成長していくことが目指されている。

また、本研究では、学習者が授業で感じる不安として、英語授業で困っていることや授業に対するリクエストを集め分析をした。学習者からの、リスニングや語彙、発音など英語そのものに関する不安の他、資格試験、授業の在り方に関する回答をクラス内で共有・ディスカッションした結果、英語授業に対する不安の解消に繋がったことが分かった。

今後、探究的実践を進め、学習者に対する理解、指導法の改善、教員としての成長に繋げることを目指していく。

## ワシーリー・エロシェンコとエスペラント語

野田 晃生 (中国・黔南民族師範学院)

ワシーリー・エロシェンコ (英語表記: Vasilii Yakovlevich Eroshenko、ロシア語表記: Василий Яковлевич Ерошенко) (一八八九～一九五二)は、ロシア出身の詩人である。エロシェンコは、四歳の時に病気のために視覚障がい者(全盲)となった人物である。日本において、エロシェンコは全盲のロシア人として、無政府主義者、エスペランティスト、詩人、童話作家等として知られる。

エロシェンコは、母語であるロシア語に加えて、日本語を習得して創作活動を行った。また、それに加えて彼が習得した言語がエスペラント語であった。

本発表では、エスペラント語を用いる、エスペランティストとしてのエロシェンコについて見る。彼は、国際言語を目指したエスペラント語によって、何を求めたか、についてが本論文において論じたいことである。エロシェンコのエスペラント語に対する思想、エスペラント語をめぐる行動について、本発表においては考察する。

エスペラント語の創始者であるザメンホフは、人類が平和に共存することを目指してエスペラント語を作った。その平和主義を、エロシェンコも生涯を通じて追い求めていくこととなった。

エロシェンコは、一八歳でエスペラント語を身につけた。そして、彼は、エスペラント語を手がかりとして、世界とつながるようになる。このことは、その後の彼の人生を決めたことでもあった。エロシェンコは、エスペラント語に人類の未来を託そうとしたのである。

エロシェンコは、来日し、東京盲学校で学問を修めるとともに創作活動を行っていた。エロシェンコは、日本にいた際、多くのエスペランティスト達との交流をもっていた。

後に、エロシェンコは中国に移動し、北京大学でエスペラント語の教員として勤務した。その時のことは、魯迅によって書かれている。

その後、エスペラント語の運動は、衰退してしまう。エロシェンコは、中国からソ連へと移動した。エロシェンコは、その生涯を通じて人類愛を追求した。その手段が、世界共通言語であるエスペラント語であったということを、本発表においては考察する。

## 北部タイ山岳民族と消滅危機言語

樋口 謙一郎（梶山女学園大学）

本発表は、日本比較文化学会中部支部例会（2023年3月26日）で発表した「消滅危機言語の認識と課題:タイ山岳民族の事例から」の続編というべきものである。

タイにおいてタイ民族は総人口の約85%を占める。このほかに華人、山岳民族（山地民）や移民もいる。タイ政府は長らく各種の少数民族政策を実施し、それによる国籍付与やタイ語普及は、少数民族の市民性および生活水準の向上・安定に寄与してきた。

一方で、タイ北部の山岳民族が有する言語の多くが「消滅危機」に陥っているのが現状である。本発表では、この状況において、現代タイをめぐる政治的、経済的、社会的、文化面での変化が、山岳民族の持つ言語の維持にいかなる影響を及ぼしているのか、またその研究の意義はいかなるものであるのかについて検討する。

意外ではあるが、言語消滅の具体的な危機要因・過程を討究する研究は、必ずしも多くない。その第1の理由は、言語消滅危機の要因・過程が複雑に絡み合い、危機要因が同時に復興要因ともなりうるといった両義性も持つため、研究上の仮説を設定しにくいことが考えられる。第2に、消滅危機言語研究が必ずしも言語学の主流になく、個別研究の多くがドキュメンテーション、教育・再活性化など「言語本位」の研究にとどまり、具体的かつ同時代的な政治的、社会的諸制度・過程に由来する文化破壊・消失の問題として捉えきれていないことが指摘できよう。本発表では、かような消滅危機言語の方法論を問い直し、可能であれば、ほかの地域や言語への応用可能性も模索したい。